

# 陳 述 書

2021年6月18日

氏名 眞野 豊

## はじめに

私は現在、国立大学法人鳴門教育大学で社会学の教員をしている。大学の授業では、教員を目指す学生たちに、ジェンダーの平等やセクシュアリティの多様性について教え、セクシュアリティによる差別をなくすための学びについて研究を行なっている。

しかし、私はもともと学問とはまったく縁のない環境で生まれ育った。北海道の僻地にある酪農家の息子として生まれた私は、文化的資本が圧倒的に少ない環境の中で、「男は男らしく」「女は女らしく」といったジェンダー規範と性的少数者に対する偏見と差別があらこちらにある環境で育った。私が研究や教育の道に進んだのは、自分自身が性的少数者として体験してきた差別に対する憤りと、そうした現実を変えたいという願いがあつたからである。自分よりも若い世代には、私が体験してきた愚かな差別による悔しい思いをさせたくない。差別と闘うために人生の貴重な時間を費やすことなどあつてはならないことである。以下では、私が性的マイノリティとして体験してきた差別の現実について述べる。

## 1 幼少期の記憶——男の子はぬいぐるみをもってはいけない

私には小学校へ上がる前に体験した忘れられない出来事がある。私はぬいぐるみが大好きでたくさんぬいぐるみを大切にもっていた。ところが、ある日それらを家の焼却場で燃やしたのだ。理由は、親や兄たちから「男の子はぬいぐるみなんかでは遊ばないものだ」と言われたからだ。兄たちは私がぬいぐるみと遊んでいると「女みたい」と馬鹿にしたし、両親は私のことを心配しているように感じた。私はぬいぐるみたちを焼却することで、兄たちからのからかいを避け、親を安心させようとしたのだ。好きなものを好きだと言つてはいけないことを私はこのとき学んだ。その後私は同様の体験を幾度となく重ねることになった。小学校の入学に合わせて、勉強机を買ってもらうことになったときも、白とピンクが美しかったキティちゃんの机を選ぼうとしたが、親からはドラゴンボールの机を勧められ、おとなしくそれに従った。この頃から私は、「作り笑い」をすることも覚えた。

このように就学前からすでに、おもちゃの種類から勉強机にいたるまで、私はジェンダーに拘束されていた。

## 2 学校での記憶——教室を支配するジェンダー規範と異性愛規範

### (1) 主語の喪失——「オレ」が言えない

小学校に上がったときにすぐあることが私を悩ませたのを覚えている。周りの男子が「オレ」という主語を使いはじめたとき、私はどうしても「オレ」が言えなかったのである。当時、私の心の中にあつた主語は、「オレ」ではなくて、「ワタシ」だったと思う。しかし、私の周りに「ワタシ」を使う男子は一人もおらず、私が「ワタシ」を使うことは許されないと感じた。そんな私が最終的になんとか発話することができたのが「ボク」という主語であつた。しかし、「オレ」という主語が男子の中で支配的な空間において、「ボク」を使うことさえも難しいことがあつた。そんなとき私は完全に主語を喪失した。「これはだれの？」-「ワタシ／ボク／オレ・・・の」このような簡単な会話さえも成立しない奇妙な事態は、高校生になつてもしばしば起こつた。私にとって自分を表すための一人称はずで自由に使えるものではなかつた。

## (2) 同性愛への気づきとクローゼット の出現

男子とスポーツなどをして遊ぶことよりも、女子とおしゃべりすることの方が好きだつた私は、教室で女子のグループに入つて遊ぶことが多かつた。ところがそのことが、学年が上がるにつれて「問題」とみなされるようになっていった。先生からはしばしば、「どうして男子と遊ばないの？」と指摘された。そう指摘されるたびに罪悪感のようなものを感じたが、どうしていいかわからなくなつた。話し方やしぐさが男らしくなかつた私は、同級生や先輩からしばしば、「ホモ」「オカマ」といった言葉を投げかけられた。学校では常に、「男らしさ」が求められ、「女々しくないこと」「ホモ／オカマではないこと」が要求されていた。当時、私はそう言われるたびに「ホモじゃない」、「オカマじゃない」とむきになって反論した。当時は私自身も「ホモ」や「オカマ」、「同性愛」を気持ちの悪いもの、変態、異常と結びつけていた。その頃すでに私の中にあつた「ホモ」のイメージは、TVのお笑い番組で見た「保毛尾田保毛男(ほもおだほもお)」というキャラクターだつた。当時はこの番組を見て私も、「きもい」とバカにしていた。学校では、男の子は「男らしくするもの」と教えられていたし、保健の授業では、「思春期になると異性を好きになる」と教えられていた。したがって、男らしくないことや同性を好きになることは、よくないことで、異常なことであると信じて疑わなかつた。そう信じるのが、差別や偏見だなどとは考えたこともなかつた。

ところが小学校5年生のある日、私は自分ではどうしようもできない大きな問題を抱えてしまった。男性に恋をしてしまったのだ。実はそれ以前にも、なんとなく同性に惹かれることがあつたが、思春期になれば女性にも興味が出てくるはずだとわずかな希望を抱いていた。ところが、思春期を迎えた私は、残酷な現実を確信してしまった。一生、この秘密を抱えて生きていかねばならないのかと思うと、絶望感で押しつぶされそうになつた。小学校5年の時私は、この秘密が誰かにばれて、家族に迷惑をかける前にこの世から消えてなくなりたいと本気で思っていた。

### (3) 逃れることができない異性愛の世界

中学校や高校の頃、怖かった話題の一つが異性に関する話題であった。思春期の子供たちにとって異性に関する話題は、友達との絆を深めるためにも避けては通れない話題だろう。しかし、「好きな女子はだれ?」「好きなタイプは?」など、異性愛であることを前提にしたこれらの問いは、異性愛者であることを強制するものでもあった。私はこの質問を受けるたびに、好きでもない女性の芸能人の名前をあげて、その場をしのぐしかなかった。嘘をつき異性愛者を演じなくてはならないストレスから逃げるために、ある時から私は人を遠ざけるようになった。人と関わらないことが、自分を守る手段だったのだ。しかし、結局それは、自分で自分をさらに孤立させることになってしまった。

しかし、人と全く関わらないで生活することなどできるはずがなかった。家でも学校でも常に異性愛者を演じることが要求され、24 時間心が休まる時はなかった。高校生になるとそうした緊張と不安はピークに達した。「ばれる」ことへの恐怖と将来への不安で頭がいっぱいになった。そのころ、学校へ行くといつも廊下や教室の床が傾いている感覚があった。極度のストレスにより平衡感覚もおかしくなっていたのだと思う。家に帰ると極度の緊張状態からは解放されるが、不安が和らぐことはなかった。緊張から完全に開放されるのは寝るときだけだったが、それでも熟睡することはできなかった。夜中、何度も金縛りにあって目が覚めるので、ずっと眠りが浅く、昼間学校に行ってもずっと頭がぼうっとしている状態だった。

### (4) 動くことも話すこともできない教室

学校生活の中でも休み時間や給食の時間は、生徒が緊張から解き放たれ、休息する時間の一つであるはずだ。ところが、私はこれらの時間が大嫌いだった。学校で「自由な」休み時間などすべてなくなってしまうと思っていた。私にとっては、勉強の時間だけが学校で唯一、安心できる時間だったからである。授業中は、私にとって他者から攻撃される危険性が最も低い、一番安全な時間だったのだ。ところがひとたびチャイムが鳴り、休み時間が始まると、教室は危険な空間へと一変した。

自分の席から離れ、好きなところへ歩いたり走ったりする。友達とおしゃべりをする。物をつかむ……。これらの単純な動作をするときさえ、私は緊張し恐怖を感じた。私が席を離れて歩いたり、走ったりするだけで、その歩き方や走り方が女っぽいと指摘された。私が誰かにしゃべりかけるとその言葉が女っぽいしゃべり方だと指摘された。私が自らの手で何か物を「つかむ」ときさえ、細心の注意が必要だった。「小指が立っている」と指摘されるからだ。歩くことも走ることも、しゃべることも、物を持つことさえも自由にできない空間。私にとって学校の教室はまさに、地獄だった。

## 3 電話相談でのカミングアウト

教師は子どもたちに向かって、未来に希望を持ちなさいと言っていた。ところが、その

言葉は、私の心には全く届かなかった。性的マイノリティである自分には、将来どのような未来が待っているのかと考えると不安に押しつぶされそうになるだけだった。身動きひとつ自由にできない教室で、必死に差別と闘っている私にとって、教師の能天気な言葉は空疎なだけだった。目の前にある差別や偏見を見ようとしない教師の言葉には、むしろ怒りを覚えた。

高校2年生の終わりの頃、いよいよ来年は大学受験というとき、私は将来への不安に押しつぶされそうになっていた。学校や教師への不満から、教師になりたいという夢を持ち始めていた頃だったが、同性愛の悩みは一人では抱えきれないくらいに大きな負担になっていた。このままでは受験勉強にも集中することができず、大学受験も失敗して人生がめちゃくちゃになってしまうのではないかと思った。受験に集中するためにも、誰かに悩みを打ち明けたいという思いが高まっていた。そのころ偶然知ったのが、子どもの電話相談の存在だった。ここなら誰にも知られずに匿名で相談ができると考え、初めて人に話そうと思った。

「僕、同性愛者なんです」「この先、どう生きていけばいいかわからないんです」。人生で初めてのカミングアウトだった。問題が解決したわけでも、何か答えをもらったわけでもなかったが、1人で抱えてきた秘密を誰に打ち明けることができたということだけで、気持ちが楽になった。相談できるところがあり、1人で悩まなくていいということに気付けたことで、前に進む力勇気が湧いた。

#### 4 教育大学で直面した差別の再生産

大学は、地元の教育大学を選んだ。学校から差別をなくすためには自分が教員になるしかないと考えたからである。小学校、中学校、高校と学校で差別を受けてきた私は、学校という場所が大嫌いだったし、正直なところ怖かった。しかし、自分が教員になれば、学校の中にある差別の現実を少しは変えられるのではないかという希望も抱いていた。

そして、差別をなくしたいという思いを抱いて入学した教育大学で学んでいたある日、私は忘れられない差別体験をした。それは、学部の3年生のときであった。性教育の特別講義として産婦人科の先生が授業を行なった。その授業の中で、「異常性欲」の例として同性愛が例示された。その瞬間、受講していた学生たちが大笑いし、講義室が笑いに包まれた。受講生の一人だった私は、他の教育大生が同性愛の文字を見て笑う光景を目の前にして何も言えず、その時間をただ悔しい思いで耐えるしかできなかった。ここで笑っている学生たちが教師になれば、また差別が再生産されるのではないかと想像すると、悔しくてたまらなかった。ほんとになんとかしないと決意した、私にとって忘れられない場面のひとつである。

この悔しい体験から3年後、教育大学の大学院を修了した私は、同性愛に対する差別との闘いを決意しゲイ・スタディーズを学ぶために、広島の大学に進学し、再び修士課程から学ぶことを決めた。

## 5 母との対話

教育大学の大学院を修了したあと、広島大学院へ進学して、ゲイ・スタディーズを学ぶことを決めていたが、広島の大学で何を勉強するのかについて、家族には秘密にしていた。当時、「広島で何を研究するんだ？」と家族に尋ねられたときには、「社会学」とか「多文化教育」などと答えていた。

広島への引越し準備に追われていたある日、私は母に告白をすることになった。それは、母と二人だけで、何気ない会話をしているときであった。母が次のように私に尋ねてきた。「今日、あんたの机の上にあった本見たよ。そしたら何なのあれ。あんたあんなこと研究するのかい」。母の口から飛び出した突然の言葉を受けて私は全身が凍りつく思いをした。母が見たのは、『ゲイ・スタディーズ』<sup>1</sup>という日本で始めて出版された同性愛研究の本であった。

私は一瞬、気が動転して言葉を失ったが、いずれは話さなくてはならないことだと決心し、心を落ち着かせて覚悟を決めて私も切り出した。「そうだよ、あれが日本で初めて出版されたゲイ・スタディーズの本」。それから、堰を切ったように性的マイノリティのおかれる状況や自分の研究に対する思いを伝えた。すると、しばらく黙って聞いていた母は次のように言った。「あんたのやりたいことはわかるし、そういう研究が必要だってこともわかった。けれど、それは田舎には必要ないからよそでやって。田舎には必要ないし、ここの住人には理解できないから」と。

最後に、「他に聞きたい事ある？」と母に尋ねると、母からは「ない。怖くてきけない」とだけ返ってきた。けっきょく私は、母に自分のセクシュアリティをとほっきりとは伝えることはできなかった。

## 6 家族へのカミングアウト

はっきりとしたカミングアウトはできないまま、私は一人広島で二度目の大学院生活を始めた。広島で暮らし初めて最初の年、私はたまたまテレビに同性愛の当事者として出演することになった。性的マイノリティへの差別をなくすためには、見えない存在から、見える存在になる必要があると考え、実名でモザイクなしで出演することを承諾して出演した。TVでカミングアウトすることは、同時に北海道に住む家族にも事実を伝えることに

---

<sup>1</sup> ヴィンセント、キース、風間孝、河口和也 1997 『ゲイ・スタディーズ』青土社。この本では、ゲイ・スタディーズを次ぎのように定義している。「当事者たるゲイによって担われ、ゲイが自己について考え、よりよく生きることに関与すること、さらに異性のあいだの愛情にのみ価値を置き、それを至上のものとして同性愛者を差別する社会の意識と構造とを分析することによって、同性愛恐怖・嫌悪と闘っていくのに役立つ学問」[ヴィンセントほか 1997: 2-3]。

なると思われたが、けっきょく私の地元の北海道の東部では放送されなかった。そのため放送が終わった後に、VTRを家族一人ひとりに見せてカミングアウトすることにした。

VTRを最初に見せたのは母親であった。母は、寂しそうな表情でうなずきながらVTRを見ていた。VTRが終わると母は、「そんな感じはしていたけれど、本当にそうだとは思っていなかった。でも、それは豊の人生だからね」と言った。

その後、兄にVTRを同じように見せた。兄は、「そんな気はしていた。小さい頃からお前のことは見ているから。お前がゲイであろうが俺の弟に変わりはないし、気持悪いなんて全く思わない」と言ってくれた。

このようにして、母と兄にカミングアウトした後、最後に父にVTRを見せようとした。ところがこのあと、母と兄から、「父に言うのはもう少し様子を見てからにしよう」と説得され、父へのカミングアウトは見送ることにした。それから、今日にいたるまで父へのカミングアウトは未だに実現していない。大学に職を得た現在でも、私は父にだけ本当のことを打ち明けられずにいる。家族へのカミングアウト、特に親へのカミングアウトはとりわけ勇気が必要である。本当のことを伝えたあとに否定されるのが怖いからである。それだけ私にとって父は大事な人であり、失いたくない存在なのだと思う。

## 7 学校でのカミングアウト

広島で大学でゲイ・スタディーズを修めたことが自信となって、その後、中学校で教員となったときには最初から同性愛をカミングアウトして教員を務めた。中学校教員として同性愛をカミングアウトすることは、差別と闘うことであると同時に、私が子どもたちの受けてきた教育への挑戦でもあった。

ここからは、私が公立学校でカミングアウトするに至った経緯や学校内でカミングアウトすることによって見えてきたことについて述べる。

### (1) なぜ学校でカミングアウトしたのか

大学院でゲイ・スタディーズを学んでいた私は、教員になったらゲイであることを隠さないと決めていた。そう決意したのは、小学生の頃に自分が同性愛者だと気付いてから、誰にも相談できずに悩んだ孤独な経験があったからである。私が子どもの頃、身の回りにある同性愛についての情報は否定的なものばかりで、同性愛を肯定する情報はほとんどなかった。テレビではお笑い芸人が「ホモ」をネタに笑いをとっていたし、家庭でも学校でも同性愛はよくないものと教えられてきた。保健の授業では、「思春期になるとだれでも異性に関心が芽生えてきます」と教えられ、教科書にも同性に恋をしてしまう自分を肯定する言葉はなかった。同性愛者として幸福な生き方をしている大人はどこにも見あたらず、将来が不安でたまらなかった。自分の力では、変えようのない現実と1人で向き合うしかなくなった日々は、苦痛でしかなかった。こんなに辛いことしかない人生など早く終わってしまえばいいと、そんなことばかり考えていた。

もしあの頃、同性を好きになってもおかしいことではないと学校で教えられていたら、あるいは、ゲイであることを堂々とカミングアウトしている教師に出会っていたなら、どんなに心の支えになったことだろう。私はいつか教員になることができれば、子どもの前でゲイであることを話したい、こんな夢を抱くようになっていた。そして、二つ目の大学院修了後、その夢を叶えるチャンスがやってきた。

教員になったらカミングアウトすることを決意していたものの、公立の学校でカミングアウトすることについて不安がなかったわけではない。当時は、周囲からは「今はやめたほうがいい」と言われることが多かったからだ。「教育現場でのカミングアウトはリスクが高い」「カミングアウトしてもメリットはない」「正式に採用されるまでは言わないほうがいい」など、ほとんどの意見はカミングアウトに否定的だった。しかし、ゲイの教員としてカミングアウトすることで、救われる子どもがいるかもしれないと考えたとき、私にはカミングアウトしないという選択肢は考えられなかった。今、カミングアウトしなければ、いつまでたっても差別をなくすことはできない。ゲイであることを隠すのであれば、私が教員をやる意味はないとさえ思った。

## (2) 生徒へのカミングアウト

カミングアウトといっても唐突に言うわけにもいかないので、基本的に私は生徒に尋ねられたら、それを認めるという方法をとってきた。しかし、ある学校では新聞記事がきっかけでカミングアウトすることになった。

福岡の学校へ勤め始めて一ヶ月が経とうとしていたころ、1人の生徒がインターネット上に公開されていたある新聞記事を印刷し、学校に持ってきたのである。それは、私が学生の頃に同性愛を公表して行った講演の記事だった。生徒から、「先生ってゲイ？」と聞かれ、「そうです」と答えた。すると私がゲイだということは、たちまち学校中に広まること

になった。そのあと私はすぐに校長室に呼ばれた。

校長から記事に書いてあることについて説明を求められた。「私がゲイであることは事実ですが、理科を教えることに何の影響もありません」。そう説明すると校長は、「わかりました。これからは理科の指導を先生にお願いします」と言ってくれた。

その後も記事を読んだ多くの生徒から「先生って本当にゲイですか？」と聞かれた。そう聞かれる度に、「たしかに先生はゲイだけれど、ゲイであることは特別なことではない」と説明した。そんな私にある生徒は「そこは否定すべきでしょ」と言うので、こう答えた。「ゲイであることは悪いことでもなんでもない。もし先生がゲイであることを否定してしまったら、このクラスにいるかもしれない当事者の生徒に対しても失礼なことになる」と。



図1 中国新聞 2008年2月4日

どの生徒も最初は驚くが、ありのままを話す私に否定的な態度や暴言を吐く子どもはほとんどいなかった。むしろ、「応援しています」や「すごいと思う」といった反応が返ってくるが多く、カミングアウトによって子どもたちとの信頼関係が強くなったと感じた。

ある年には、授業開きの直前に「先生がゲイって本当ですか」と尋ねられた。生徒の中には、きょうだいから私がゲイであることを聞いている者もいたのだ。授業開始のチャイムが聞こえたが、次のように話した。「この世の中には、女の人が好きな男の人や男の人が好きな女の人もしれば、男の人が好きな男の人や女の人が好きな女の人もあります。ただ、それだけのことです。」生徒は、一瞬の静寂の後「なるほど」とうなずいたり、「おー」とか「かっこいい」と言ったりしていた。そのまま何事もなかったかのように授業を始めた。

新しい学校、教室で子どもたちと出会うとき、私はさまざまな形でカミングアウトをしてきた。しかし、いつも気をつけていたことは、目の前の子どもたちを信頼し、事実をそのまま伝えることだった。教室の中には、必ず当事者の子どもがいる。これまでたった1人で孤独とたたかってきた子どもが。そうした子どもの存在を先ず想定して、「あなたは1人ではない」というメッセージを伝えたかった。また、教員の中にも当事者がいるということ子どもに示すことは、すべての子どもが性の多様性について学ぶ機会にもなると考えた。もしも、私がゲイであることを言わなければ、異性愛が当たり前だと考えられがちな文化の中で私は異性愛の教員として見られることになり、性の多様性に関する学びは起こらないだろう。あるいは、否定したり、ごまかしたりすることによって、差別することを子どもに教えることにもなりかねない。私は、カミングアウトによって、くだらない差別を終わらせたかったのだ。

### (3) 「先生は間違っていない！」

それを私が耳にしたのは放課後の掃除の時間だった。監督のために担当区域に行くと生徒たちが寄ってきて、ある出来事を報告してきた。「〇〇先生が同性愛はキモイって言っていた」、「男子がじゃれあっているのを見て、お前ら同性愛か。気持ち悪いからやめろって」。生徒が授業中にふざけていたのだとしたら、注意されるのは当然のことが、そこで「同性愛」や「気持ち悪い」という言葉を使う必然性はない。ベテランの同僚教員の発言だったが、私は「そんなこと言う人が間違っています。同性愛は気持ち悪くも、間違いでもありません」と言った。すると子どもたちは、「こんなこと言われて先生傷ついた？」「どうすると？」と詰め寄ってきた。教員によって言うことが異なるという事態は望ましいことではない。二人の教員の主張が相反するという事態に生徒は興味津々の様子だった。意見を求めてくる生徒たちを見ながら、その教員の発言を思い浮かべると悲しみと同時に怒りがこみ上げてきた。「先生大丈夫？」と声をかけてくる生徒に思わず、「私はどれだけ傷ついたっていい！だけど、その場に当事者の生徒がいたかもしれないとよ！」そう言うと同時に涙がこぼれていた。

そんな私に生徒は、「わかるよ先生。俺たち、先生の見方やけん」「先生は間違っていない」



とってくれた。生徒は私の味方だった。生徒よりも、大人である教員の認識を変えることの方がずっと難しい。しかし、これは難しいという言葉で済ませたり、見過ごしたりすることができる問題ではないと思った。教員の認識が変わらなければ、また同じことがくり返される。私はどうしたらいいのか悩んだが、その教員に直接確かめることにした。どのようなタイミングで、どう言えばいいのか。教員経験の浅い自分がこんなこと言ってよいのだろうかとも悩んだが、生徒の事を考えるとやるべきこと、言うべきことは決まっていた。「お話ししたいことがあるんですが」。私は問題の発言をした教員に、生徒から聞いた内容について、事実であることを確かめたうえで、次のように伝えた。「生徒の中にも性的マイノリティはいます。もしかすると、その場において聞いていたかもしれません。教師が同性愛を否定する発言をすると、それを子どもが真似するようになります。どのような場面であっても教師が子どもの前で言うべきことではありません」と。実はそう言いながら、どんな返答が返ってくるのだろうか私の心臓はばくばくしていたが、その教員は言い訳や反論をせずに「わかりました」と一言だけ言った。

どのような職場でも、誰かが差別的な発言をしているのを見聞きするという事態は起こりうることだろう。しかし、そうした場面に出会ったとき、何をどこまで言うべきなのか、言わない方がいいのか。職場で起こる差別事象にどう対処していくべきかは大きな課題だ。

#### (4) 元生徒たちとの再会

福岡県で最初に教えた生徒たちが二〇一四年に成人を迎えた。この年、二〇歳になった元生徒数名の協力を得て、あるイベントが行なわれた。「ゲイ教員と二〇歳になった元生徒たちとのトークイベント」である<sup>2</sup>。これは、同性愛をカミングアウトした教員について、生徒たちはどう思っていたのかなどを話し合うトークイベントであった。彼らと会うのは、彼らが中学校を卒業して以来であったこともあり、私自身このイベントをとっても楽しみにしていた。そして、この会場で元生徒たちの中学校当時の心境を初めて聞くことになった。

彼らの一人は、「正直、最初は驚きました。今までそういう人に会ったことがなかったからです。でも、眞野先生があまりにも自然に言っていたので、ゲイであることは特別なことではないと思えるようになりました」と語った。子どもたちの多くは、性的マイノリティであることを公表している人と出会った経験がないために、メディアで描かれる同性愛嫌悪的なキャラクターを信じたり、大人から聞いた根拠のない噂を鵜呑みにしたりしている。そのため筆者が同性愛者であるという事実を知ったときほとんどの生徒が驚き動揺する。しかし、それらの同性愛に対する知＝偏見は、実体を伴ったものではない。同性愛に対する「特別なこと」という印象は、実際にゲイを公言する教師との出会いを通じて、筆者という実体に引きずられながらも、変化していった。その結果、同性愛者に対する「特

---

<sup>2</sup> このイベントは、福岡市を拠点に活動する NPO 法人「レインボースープ」さんに企画していただいた。

別な人」という偏見が解体されていったと考えられる。同性愛者に対する恐怖、すなわち同性愛嫌悪とは、実体を知らないことからくる恐れなのである。

また、別の元生徒は進学先の「高校でレズビアンの人に出会いました。でも中学校のとき眞野先生と出会っていたので普通に接することができました」と語った。元生徒らは卒業後、進学先や就職先で多様な人と出会っている。当然そうした出会いの中には、性的マイノリティとの出会いもあるだろう。そのとき中学校のときにゲイの先生がいたという経験が、何かしらの役にたっていたとすれば、この上なく嬉しいことである。中学校で彼らにカミングアウトしたことが、彼らの人生にとってプラスなることが少しでもあるなら、カミングアウトをして本当によかったと思う。

#### (5) カミングアウトで私が得たもの

学校でカミングアウトする前は、差別されるのではないかという心配が私にもあった。カミングアウトすることによって、たくさんものを失うのではないかと思ったこともあった。しかし、実際に私がカミングアウトして失ったものは何一つない。むしろ、カミングアウトしたことによって味方ができ、生徒との信頼関係も強くなった。ある朝、教室へ行くと、誕生日のお祝いを黒板いっぱい書いてくれていたこともあった。また、教員という仕事柄、元生徒に再会することはしばしばあったが、私はその度に嬉しくなった。彼らが気軽に私に話しかけてくるからだ。あるとき、車のタイヤがパンクしたので、タイヤ屋さんに行くと、「眞野先生！」と声をかけられた。見ると、担当の整備士が中学校で教えた生徒だった。偶然の再会に驚きながら、お互いに近況を報告し、嬉しくてしばらく話し込んでしまった。彼は立派な整備士になっており、とても丁寧に仕事をしてくれた。

別の元生徒は小学校の教師になっており、銭湯で再会したときに、なんとコーヒー牛乳をおごってくれた。また、別の女子生徒は、私の行きつけのクリーニング屋さんで働いていて、いつも気軽に話しかけてくれる。彼女とはときどき恋愛について話したりもする。

これらはすべて何も特別なことではない。しかし、元生徒たちと普通の会話ができること、このことが私にはとてつもなく嬉しい。彼らは、私という人間を一人の人間として見ているのだ。彼らにとって、私のセクシュアリティはもはや特別な意味を持たない。このような関係が、あるべき姿であり、とても自然な姿だと私は思う。

たった一言のカミングアウトが、周囲の人々を変え、学校を変え、社会を変える。私が経験したこれらの体験は、私の個人的なものだが、紛れもない事実である。

### 8 「結婚の自由をすべての人に」訴訟に寄せる思い

近年、同性パートナーシップ制度を導入する自治体も増えているが、法的な効力を持たないパートナーシップ制度では、性的マイノリティの生活の保障や人権の保障という観点から考えて不十分であると考えられる。性的マイノリティの人生を豊かにし、経済的な安定や安心だけでなく、精神的な安心を得るためには、法的な後ろ盾が不可欠だからである。

しかし、同性同士の婚姻を法的に保障することが必要な理由はそれだけではないと考える。異性愛のカップルと同様に同性カップルの婚姻を保障することは、性的マイノリティへの差別を解消するためにこそ不可欠であると考えます。婚姻が男女の間にしか認められないということが、同性愛者への差別を社会的・制度的に支えているからである。司法が法的に同性同士の家族と認めることは、そうした差別意識を解消するために不可欠である。人々が同性愛者を差別しなくても済むように、日本に暮らす同性愛者が自分の存在を否定しなくても済むように、同性愛者がこれ以上自殺しなくても済むように、人としての価値に何の違いもない異性愛者と同性愛者が同等の権利を享受できるように、司法には、同性同士の結婚を正当な権利と認める判断をしてもらいたい。

#### 参考文献

- ヴィンセント、キース、風間孝、河口和也 1997 『ゲイ・スタディーズ』 青土社  
眞野豊 2020 『多様な性の視点でつくる学校教育——セクシュアリティによる差別をなくすための学びへ』 松籟社